● 読書感想文コンクール　中学校の部 ●

入選

横川　拓矢（よこかわ　たくや）　第一中 ３年生

作品名:「大切なもの」
図　書:ぼくは勉強ができない

「僕は確かに成績が悪いよ。でも、勉強よりも素敵で大切なことがいっぱいあると思うんだ。」
これは初めて手に取ったその本の背表紙の内容紹介に書かれていた主人公の言葉だった。この言葉を見た僕は、読んでもいない本の主人公に共感してしまった。もちろんそんなことは初めてだった。

この本を知ったのは、自分からは手に取らないような本が読みたくなり、塾の先生に何か面白い本はないかと尋ねたときだった。先生が勧めてくださった幾つかの本の中にそれはあった。僕はこの夏、三年間続けてきた部活動を引退し、とうとう受験生となった。そんな僕は、「勉強」という言葉に敏感になっており、『僕は勉強ができない』だなんてタイトルを聞いたら気になって仕方がなかった。そこでその日の塾の帰りにすぐに書店に立ち寄り、その本を手に取った。連日の塾の夏期講習で勉強に嫌気が差し始めていた僕は背表紙の言葉に共感し、その本に引き込まれた。

主人公の時田秀美は十七歳の高校生で、大学には行かないと決め、勉強を放ったらかし、色恋にうつつを抜かすような人間だ。しかし秀美は、教師を前にしても臆さず、自分の意志を貫く真っすぐな人間でもあった。

そんな秀美の言動や、その周りで起こることについて、何度も深く考えさせられた。

一つ目は、学年トップの成績で、何かと秀美に嫌味を言う脇山に対して放った言葉だ。
「おまえはすごい人間だ。認めるよ。その成績の良さは尋常ではない。でも、お前、もてないだろ。」
この言葉に脇山は顔を真っ赤に染め、絶句してしまう。秀美は更に、
「ぼくは確かに成績悪いよ。だって、そんなこと、ぼくにとってはどうでも良かったからね。ぼくは彼女と恋をするのに忙しいんだ。」

と放つ。この言葉はあの背表紙の言葉と同じ意味だ。しかし、僕はこの言葉を目にし、初めてあの背表紙の言葉を見たときとは明らかに違う感情を抱いていた。秀美の言葉自体には賛成だが、勉強が全てだと思う人だっている。脇山も秀美に嫌味は言っていたが、だからと言って「もてないだろ」の一言で全て否定するのはあまりに酷い。人にはそれぞれの価値観がある。脇山は勉強が全て、秀美はそれだけじゃないと、それぞれが思っている。僕は勉強全てだとは思わないし、勉強が全てだと言っている人のことはよく理解できない。しかし、その価値観の違いにより衝突することが多少あっても、相手の全てを否定することは絶対にしてはいけないのではないだろうか。

　二つ目は、秀美のクラスメイトであった片山が自ら命を絶ってしまったときの話だ。秀美は片山とはそこそこ仲が良く、彼の死には当然ショックを受ける。何故突然、自殺などしたのだろうと考えているうちにあることを思い出す。生前、片山が口にしていた言葉だ。

「ぼくは生まれたときから時差ぼけなんだよ。」

彼によれば、人間とは本来、二十五時間を一日の周期として生きており、二十四時間の一日を過ごすと必ず一時間の差が出るのだ。普通の人間は、日常の動作をくり返す内に少しずつ体をだまし、小刻みに時間を振り分け、つじつまを合わせる。しかし、中にはそれがどうしてもできない人がいて、生活に支障をきたしたりするのだ。秀美は、片山はそれがどうしてもできない人間であり、他の人にはない一時間を上手く過ごせず自殺したと考えた。果たして、本当にそれだけで自殺に至るのだろうか。片山は、生きがいとなる大切なものが持てなかったのではないだろうか。当然だが、僕は今まで生きてきて、一度も自殺しようなどと考えたことはない。それは、今まで感じたこともないが、常に生きがいとなる大切なものを持ち続けたからだと思う。今まで辛い思いをしたことは何度かあったが、その度に大切なものが支えとなり、僕は立ち直ることができたのだ。片山も、余ってしまう一時間を当てたくなるような大切なものを持てば、自ら命を絶つようなことはなかったのではないだろうか。

　これらの話を読み、考えることで、生きていく上でとても大切なことを知ることができた。自分にとって大切なものを持つということだ。それは、人のいきがいにもなり、個性ともなりうる。だから僕は、これからも大切なものを持ち続けていきたい。